

戯曲と実生活

秋元松代



戯曲と実生活

著者 秋元松代

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四〇一

郵便番号 一〇二

電話 東京 (〇三) 二六五—〇四五

振替 東京 二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社 石津製本所

発行日 昭和四十八年三月一日 初版第一刷発行

定価 九四〇円

© Matsuyo Akimoto 1973 Printed in Japan

0395-333010-7600

戲曲と実生活

目次

三好先生の思い出 7

晩年の岡田八千代 26

白 珠——橋本多佳子さんのこと—— 29

『青崖』によせて——岸田潮二さんのこと—— 36

歲月の中の母 38

ゆっくりと一気に——わたしの文章作法—— 42

『かさぶた式部考』について 48

『常陸坊海尊』について 75

方言について 79

絵金の周辺を歩いて——土佐取材記(一)—— 82

土佐の人形つかい——土佐取材記(三)——

100

赤岡再訪——土佐取材記(三)——

107

菲生さんぶん——土佐取材記(四)——

114

七人みさき

122

三月の雪——『北越誌』ロケ隊とともに——

126

平泉以北の義経

134

扉のことば

145

わたしの幽霊

148

雨と雨傘

152

言葉の喜び

155

好きということ	159
金魚一匹	163
危ない窓ぎわ	167
ひとりの味	172
小鳥の名を尋ねて	192
感動と反撥	195
自転車	201
からすうり	203
閉じこもる日々	206
天草の春と冬	209
夜ふけの電話	211

冥途の飛脚 214

好きな字 218

円筒型 224

柏崎 228

彼岸の雨 232

島にいる友達 237

旧下目黒四丁目 243

波奈井旅館にて 251

キューという仔犬

絹糸

水色のドレスの女

あとがき 280

装
幀

榎
戸

真
喜

戯曲と実生活

三好先生の思い出

その一

低い、静かな声で先生はいわれた。

「日本が戦争に敗けたということは、単に軍事的に敗けたということではない。民族の持ついるあらゆる面で日本は惨敗した。日本の演劇も敗けた。日本の戯曲も敗けた。わたし達はまずそのことを知るところから始めなければならない」

敗戦から約半年後の、昭和二十二年二月に、三好先生が戯曲研究会を結成された時の言葉である。集まった者は、多くは復員服の二十代の青年たちだった。まだ戦場の血なま臭い殺気が体中から立ちのぼっていた。

先生がこの研究会を作られたのは、真の演劇運動が戯曲の研究と創造を軸として起されなければならないという、劇作家として当然の意図によるだけでなく、戦争を起した力に抵抗し、阻止することが出来なかったという事実に対する反省から生れたものだった。そして戦後の日本に、アメリカへの追従と植民地化への必至を予見され、その語調は静かだったが、深い憂慮に貫かれていた。

「ぼくに出来ることで、若い諸君の力になりたい。ぼく自身も、それから君たちも幸福にならなくてはならない。幸福な人とは、どのような外的な事情や力をもってしても、打ちこわすことの出来ない、うばい取ることの出来ない信念を持って生きる人。他人のため社会のためにすることが、そっくりそのまま即ち自分のためになるような仕事をもち、またそのようなやり方で仕事をしている人。そういう人間になりたい」

先生について語ろうとすると、あまりに大きな魂についてものをいう困難に突き当る思いである。それは矛盾した大きな生命の一つだということである。意力と愛情と怒りに充ちていた。頑固なほど潔癖で片意地かと思うと、優しさと思いやりで私たちを感動させた。緻密な頭脳と説得力の強さ。まったく計算を無視した世間知らず。偏執的かと思うほど敵を憎み、また寂しがりやで底抜けに善意だった。——いうならば、すべての人間が持っている弱点のすべてと、多くの人が望んで得られない美点の多くを持っていた。

研究会に私が参加したのは、劇作家を望んだというよりは、いかに生きるべきかの方途に迷い、溺れる者が救いを求めに行ったのだった。先生はほとんど私に何の質問もせず、「何か書いて来てごらん」といわれた。私は「戯曲は書き方も知りませんし、書こうという気持も本当はないので、何を書けばいいのでしょうか」とおたずねすると、「小学校時代に作文か童謡を書いたでしょう、原稿紙に二枚か三枚でいいのです。ただし、あなたがこれだけは、ぜひともいいたい、それをいわねば、あなたの精神の大切な部分が亡びてしまうと思うことが、一つはあるでしょう。」

それを分りやすく、誰か一人の人に話しかける気持で書けばいいのです」と、いわれた。

それは溺れる寸前にある者に投げられた一筋のロープだった。

先生がもっとも素晴らしい力を示すのは、生きながら死にかかっている者、重荷の下で窒息しかかっている者をその場で、そのまま生き返らす時である。それは魔術師的な説得力とでもいおうか。深く人間を愛することの出来た先生にしか出来ないことだった。そして先生からロープを投げてもらった者は、私ひとりではなかった。

研究会での三年間、またそれ以後でも先生は一度も戯曲の技術論や作劇論をされたことがなく、終始、人間について、人生についてのみ語られた。それらの美しい言葉、真実のあふれた言行のすべてをここに書くことが出来ないのをもどかしく感ずる。また、それ以上に悔いても及ばないことは、先生の教えがあまりに豊富であったために、私はその多くを忘れてしまっている。また、覚えていることも、私の不明鈍根のために、ある時はかえって私の手足にからまり、私を苦しめる時があった。すると先生の声がきこえて、

「ぼくは君の先生でも先輩でもないんだ。ねずみの取り方を少しばかり仔猫に教えた親猫でね、あるいは田舎者のばかなおふくろで、子供がどうか旨くやるようにと、仏壇でお線香でもあげることに知らないんだよ。ぼくのいったことなんかみんな忘れて、親猫を突きとばして行くような恩知らずになり給え。でないと、ろくなねずみはとれないよ」

向うむきになって仏壇にお線香をあげている母親、その後姿が先生になり自分の母親になる夢

をこの十三年間に何度かみた。私にとって、精神の父と呼ぶべき人があるとすれば、それは三好先生しかない。私が書けないでいた時、先生はぽつと言、

「芸術家になろうとしないで、人間になろうとすればいいのだ」といわれた。（新劇 34・2月号）

その二

先年亡くなられた三好十郎氏の戯曲研究会で教えをうけていた頃、すなわち敗戦後でもない頃だったが、先生が時にふれて語られたことを、記憶をたどりながら書いてみることにしよう。

ある戯曲の素材となるものを掴んだと悟ると、すぐにも書きたくなるものだが、そういうことをしてはいけない。また、果して自分の力倆で描けるかどうか、非常に迷う場合も同様だが、そのテーマをどのくらいの期間、どのくらいの強さで保持していられるかが問題の解決になるのである。すなわち、一日のうち、睡眠中の時間を除く他のすべての一時間ごとに、必ずそのテーマが、テーマ自身の力で動き、君をゆりさまし、君に思い出させずにはおかなくところの、そのような一時間が一ヶ月間、断絶することなく続いた場合、その素材は必ず君に描けるものである。だから勇気を出して書くべきである。書き得ない素材は、忘れてしまつて思い出せなくなるものである。

そして、書きはじめたら一気に一太刀で書け。作品には二の太刀、三の太刀というものはない、初めの一太刀で勝負がつく。そして勝負には引分けということは絶対にない。未練な男が愛人殺しを企て、三十何ヶ所斬りつけたが、相手は電車へ乗って病院へ行ったというザマでは仕様がな。いや、よくそんな作品にお目にかかることがあるよ。

また、作家が作品を書くということは、ある意味の暴力行為に等しいものだ。本当に惚れていて、どうしても自分のものにしたければ、どんなに嘘を言っても、どんな手練手管を使ってもかまわないのだ。一度これと思ったものは最後まで諦めるな。

作品というものは、恋文を書く時の気持と態度で書き給え。愛人の心と体を得るためには、君の所有する最上最良の物を使い、美しい言葉を美しい文字で書き、真実の極限を述べることである。それは嘘であつてもよい。正直でまじめというだけでは恋人は退屈して向うをむいてしまうだけだ。

人はよく、自分の中に包蔵されている思想はもっと高く、あるいはもっと進んでいるのだが、こういう作品しか書けなかったと言ったりするものだが、それは錯覚である。その人の抱いている思想の半歩うしろから従ってくる作品が健康な作品なのである。

それは自分にとって解決不可能な事実を、単なる興味や関心でスケッチとして描写してはならないということである。すくなくとも自分ならばこうするという解答の用意なくして、いかなる社会的人間的事実をもとりあげてはならない。それが作家の誠実と責任である。

題材と思想が定着したら、登場人物の一人一人について、詳細に執念深く調査して行くことだ。たとえば、彼はどんな種類の食物をどんなふうに食うか。異性に関しては何んな好みを持ち、カラーのサイズは何インチで、どのくらいのお金をどんなふうに使っているか……という具合に、考え得る限り具体的即物的に定着して行くことである。そしていざ原稿紙に向った時は、それらの一切を頭の中から叩き出してしまわなければいけない。それには作家の裡で、ある火事場騒ぎが起らなければならないということで、充分に調査され、整理されて、冷静に書かれた作品ほど無意味なものはない。それは現実の図式的処理にすぎないからだ。すべての優れた作品の原動力となっているものは、作家の怒りであり、その怒りの純粋度と高さである。

先生はものごとについて、抽象的に言うことがきらいだった。だからたとえば

劇作家になろうとするなら、ごはんをよく噛んで食べなさい。劇作家は貧乏を覚悟しなければならぬから、すくない食物で充分の栄養をとらなければ死んでしまうよ。

約束した時間は必ず守りなさい。日本では約束した時間を守ると軽輩扱いにされるが、馬鹿にされてもいいから守れ。

一度は口に入れたが、不味かったら思い切り吐き出して足で踏みにじれ。仕方がないから飲みこむということは決してするな。